

科目区分：「教科及び教科の指導法に関する科目（中学校）」

授業科目名：声楽（２）（歌唱指導法を含む） [Singing(2)(including the singing teaching)]

声楽（２）

音楽教育講座：楠 俊明

1. 授業の目的

授業の目的は「中学校、高等学校の音楽の教員として身につけておくべき基本的な歌唱技術を修得すると共に、楽曲を多角的資材から分析し、自らの解釈で演奏できる基本的学びの姿勢を養う。さらに、教育現場において歌唱指導できるための基本的知識を修得する。」である。

2. 授業の到達目標

- 1) 歌唱表現できるように必要な情報収集ができる。(知識・理解)
- 2) 楽曲の構造や内容を把握し、作品の意図や特徴を理解して、原語で歌唱表現できる。(知識・理解、技能、表現)
- 3) 歌唱表現における自己の課題を整理し、その解決方法について考えることができる。(思考・判断)
- 4) 他者の歌唱における課題を指摘し、その解決方法について考えることができる。(知識、思考・判断)

3. 授業の位置づけ

声楽（２）は3回生5名、2回生3名、計8名の受講生である。8名とも声楽基礎・声楽基礎演習、前期の声楽（１）を受講済みでそれぞれの歌唱活動の様子はだいたい把握できている。

声楽（２）の中心教材はドイツリートである。全体でドイツリートの特徴、ドイツ語の発音を学習すると共に、発声でつまずいているところを見直す活動を進めることにしたが、8人で個別に見ていくと時間が足りない。そこで、グループ・個人レッスンで授業を行うことにした。1人30分のレッスン時間を確保するため、3コマで授業を組むことにした。3人グループ2つ、2人グループ1つの3グループである。はじめの2時間と最終発表とまとめの1時間を8人全員で実施し、残りの12時間は3コマで実施した。

4. 授業の概要

授業は以下のように進めた。

- ① 全員で発声の基本の復習を行い、自分の発声法の良さと難点を考えさせた。一人ずつ歌わせながら、互いの発声について考えさせた。後半は、ドイツリート of 課題曲としてとりあげた「An die Musik」を全員で譜読みし、ドイツ語の発音についての学習を進めた。
- ② 全員で発声法の確認を行い、ドイツ語の発音について、詳しく学習しながら、課題曲を全員で歌い上げた。今後の方針を伝えて、自分で授業設計を考えさせた。授業の方針は、課題曲とドイツリートをもう1曲歌えるようになること。更に、もう1曲は声楽の授業の仕上げとして自分が歌いたい曲をイタリア歌曲、ドイツリート、日本歌曲の中から1曲選んで暗譜で仕上げることである。次回からは、一人30分の個人レッスンで授業を進め、伴奏者を連れてくることを確認して、授業を終えた。
- ③～⑭ それぞれの歌曲をグループ毎に聴き合いながら、30分の個人レッスンとその課題を考えさせて授業を進めた。
- ⑮ 最終発表会として、3曲を8人それぞれが発表し、互いにその歌唱表現について考えさせて授業を終えた。

5. 指導のポイントと実際

声楽（２）は声楽の仕上げの授業である。しかしながら、8名中7名の専門は声楽ではない。1名だめ卒業に向けて声楽で卒業試験を実施したいと希望している。それでも、歌唱表現がうまくなりたいと希望してきた学生たちである。

そのため、ドイツリートの特徴を理解させながら、1人1人の苦手な部分の修正方法を指摘し、それをグループで共有させてレッスン授業を進めていった。共有するための指導のポイントは以下の4点である。

- ① 横隔膜の支えを基板に上半身の脱力をキープしながら口腔を空ける。
- ② 声帯の力み減らして、響きが一定になるように喉の空きをキープする。
- ③ 母音の違いによる響きのポジションの変化を少なくし、メロディーが自然にきこえるように工夫する。
- ④ ドイツ語発音のウムラムトと語尾の子音をしっかりと表現できる。

これらの指導のポイントを元に、実際の指導による個々の様子を記述する。また、発表後の個々の感想の中から、出来た部分を○、未だ難しい部分を△で記載する。

◎学生 A：呼吸が浅く、フレージングが短くて苦勞をしていた。その上、発語の際に喉の力で処理しようとしているので、呼吸で空けた喉を動かさないで、下半身で支えて、舌根の脱力と口腔の空きを考えさせた。自分で喉の空きをキープして、身体の支えで歌えるように練習を進めていった。最終的には音域も広がり、レガートのフレージングで歌えるようになっていった。

- 歌い始めやブレスの後に、アの口や広さを意識して歌えるようになった。高音が無駄な力を加えずに発声できるようになった。
- △ブレスやフレージングで音の最後の処理ができていない。ウムラウト等ドイツ語の発音が曖昧である。え、いの母音ではまだ口腔が狭くなる。

◎学生 B：喉の力を使って力んで歌う癖があるため、その点を考えさせながら指導を進めた。まず、呼吸の際に喉が空いている状況を体感させ、それをキープして歌うように考えさせた。うまく表現したいと思う気持ちが前面に出過ぎて、力んでしまうのでなるべく自然な流れのフレージングをつくろうと音楽づくりを進めた。少しずつ力みがとれ、声が安定してきた。意欲が高く、少しずつ歌唱表現が安定してきた。しかしながら、高音の発声法が未だ不確定である。

- 足で地面を掴む感覚がなんとなく分かってきた。背筋を使う感覚も分かるようになってきた。息を吸ったときの涼しくなる喉の空きと広がり分かり、声が出しやすくなった。

△息のコントロールがうまく出来ず、フレーズの途中で息がなくなる。高音で喉が詰まる感覚があるので克服したい。

◎学生 C：歌唱表現力は持っているが、それを喉の力でキープしようとする癖がある。呼吸法はしっかりとしているが、力んで息の流れを止めるような使い方をすることもある。息を吸ったときの喉の空きと脱力を大切にさせた。と同時に、響きのポジションをもう少し上で前に考えさせ、フレージングが自然にきこえてくるように考えさせた。喉を静かにして歌おうと練習を進めていることがよく分かった。

- 高音部分で喉を空けて歌えるようになった。口の中をアに空けて歌う癖がついてきた。レガートを意識して歌えるようになってきた。

△息がまだ浅く、ブレスコントロールが出来ないときがある。そのため、フレージングが短くなってしまう。低音部の響かせ方が難しい。

◎学生 D：読譜が早くしっかりと歌えるが、響きが少ないため、声の広がりやボリウム感が問題である。喉の力を抜いて歌おうコツを覚えてきているが、口腔の空きが少なく、歌唱表現としては足りないところがある。口腔を空けて、息をたっぷり使って歌おうと努力し、少しずつ声の広がりが出来てきた。

- 響きを前に持ってきて歌えた。フレージングを大きく捉えることができた。

△日本語ではない言語の発音が曖昧である。呼吸法も考えて、もう少し共鳴腔を広げたい。高音域と低音域の発声の違いを少なくしたい。

◎学生 E:身体を使って響かせて歌おうと努力することが出来ている。しかし、身体全体を力む癖で響きが固くなってきている。特に、喉の力でフレージングを作ろうとする癖があり、声帯を静かに使うことを体感させた。更に口角を上げて口腔を空けることも大切にさせた。意欲は高く、努力しているが息の流れを止めてしまう声となっている。少しずつ解消されているが、呼吸法と身体の脱力の方法を考えさせたい。

○補助動作を入れて、丹田を使って支えて喉の力を抜いて歌う感覚はつかめてきた。

△息の流れを止めてしまうので、上半身のカみをなくしたい。背中の支えを考えたい。口の奥の空気を考えて響かせたい。

◎学生 F:呼吸法がしっかりとできているため安定した響きで歌唱表現ができている。喉を空けてしっかりと響かせようと口腔のキープもしっかりとしている。母音の響きによってポジションを変えすぎて、発音とフレージングがうまくつながらないところを見直すように考えさせた。少しずつ自然なフレージングで歌えるようになり、構音もしっかりとして言葉がきこえるようになってきた。

○ブレスコントロールで長いフレーズで歌うこと。表情を明るく、響きを上でキープすること。強弱を考えて自分の表現を工夫して歌えた。

△出だしの声の響きを遠くにしたい。高音域の脱力と中低音の響かせ方を考えたい。レガートの歌い方、背筋の使い方をもっと考えたい。

◎学生 G:歌唱表現力があり、しっかりと歌うことが出来るが、喉に力が入って固い歌声となることがある。呼吸法が少し浅く、フレージングが短いため、丹田の使い方、喉の空きと脱力を中心に指導を進めた。少しずつ響きを上の方で捉え、歌声が安定してきたが、喉で声を作ろうとする癖が少し残っている。身体全体で支えて、深い呼吸でたっぴりと歌うことを身に付けさせたい。

○初めてのドイツリート、発音を意識して歌えるようになった。課題のブレスコントロールは練習してうまく出来るようになってきた。

△喉が閉まってしまうこと、ウとエのポジションがまだつかみきれない。フレージングを自分で考えたり、その工夫によるブレスコントロールを行ったりすることへの課題がまだまだある。

◎学生 H:響きが定まらず、声がまとまらないで歌唱表現が安定しないところから始まったが、後半から落ち着いてしっかりとした響きで歌えるようになってきた。上半身の脱力と下半身の支えを基盤として、喉の空きと口腔の広がり、キープを中心として指導を進めた。声を響かせるポジションが決まり始めてから響きの位置が安定し、それが歌声につながっていった。また、自分の思いに合う楽曲表現を目指して、様々な工夫をしていることがよく分かった。

○何となくしか分かっていなかった発声法が少しずつ分かるようになってきた。フレーズ感を意識することで、音が切れていた表現をレガート唱法として歌う感覚が分かってきた。高音域も響くようになったので、もっとうまくなりたい。

△ブレスコントロールに苦手意識がある。練習して大きなフレーズで歌いたい。息が少しもれているので、全て声にしてたっぴりと歌いたい。ア、オは分かってきたが、イ、エ、ウの響かせ方が難しいので、口腔の開け方を考えて、響きが揃うように練習したい。

6. 授業アンケートから

授業のまとめとして、授業方法に関するアンケートをとった。その内容について、今後の方針をふまえて考察する。

① 30分のレッスン時間について

8人中8人がちょうど良いと回答している。授業としては1人30分程度の時間が必要ということになる。そのため、受講者が4名以上になった場合は、2コマ以上で実施するこ

とが望ましいということがわかった。

②外国語の発音練習の時間について

4名が増やして欲しい。4名が今のままで良いという状況であった。このことから、発音方法や語句の練習は、受講者と相談しながら、臨機応変に対応することが大切である。

③発声練習の時間について

2名は今のままで、6名がもう少し増やして欲しいという状況であった。発声が歌唱表現の基礎をつくるので、もう少し丁寧に個々に応じた発声練習を工夫する必要がある。

④音楽表現を工夫した音楽づくりについて

2名は今のままで、6名がもう少し音楽表現について考えていきたいと回答している。発声練習を行うと音楽づくりの時間が少なくなるため、その両方を兼ねた指導方法を模索する必要がある。

⑤3曲のレッスン曲数について

7名が今のままで良いと回答している。これ以上増やすと、楽曲分析や音楽づくりの時間がとれなくなるため、3曲は妥当であると考える。

以下は、最終発表会での課題曲以外の2曲の曲名である。

Ich liebe dich	Beethoven
むこうむこう	中田喜直
Der Nussbaum	Schumann
小さな空	武満徹
Die liebende schreibt	Schubert
Se tu ma`mi	Pergolesi
春の信仰	Schubert
Star vicino	Rosa
Du bist die Ruh	Schubert
Voi che sapete che cosa e` amor	Mozart
An den Mond	Schubert
Der Mond kommt still gegangen	Schumann
Lachen und Weinen	Schubert
Ideale	Tosti
Die Lotosblume	Schumann
Caro laccio	Gasparini

学生たちは自分の思いを歌に乗せて表現しようと自分に合った選曲を工夫し、楽しく取り組むことが出来ていた。しかし、外国語曲と言うことで、楽曲分析をしていく中で思いと違った曲であったことを振り返る者もいた。選曲についてももう少し助言をする必要があると考えた。

7. 終わりに

声楽の授業は本当に難しいと感じた。前担当者の木村先生のような専門的なことは出来ない。しかし、何が出来ていないかは自分の経験から少しずつ分かってきた。その指摘によって学生の歌唱表現が伸びていくことは本当に嬉しい限りである。

到達目標の4つについて具体的に考える。

1) 歌唱表現できるように必要な情報収集ができる。

指導のポイントの4つを中心にレッスンを進め、互いにききあわせながら考えさせたので、多くの学生が目標に達したと思っている。

2) 楽曲の構造や内容を把握し、作品の意図や特徴を理解して、原語で歌唱表現できる。

歌えるようになるために、発声指導と発音指導に時間を費やしたため、この項目の到達度は上げることが出来なかった。

3) 歌唱表現における自己の課題を整理し、その解決方法について考えることができる。

歌えるようになるために、自分の苦手な点と出来ている点を確認させながらレッスンを進めることが出来た。この項目は目標に達していると考えられる。

4) 他者の歌唱における課題を指摘し、その解決方法について考えることができる。

レッスンでは互いの歌唱表現について考えさせながら進めることが出来た。また、最終発表会では全ての発表への他者評価がきちんと出来ている。この項目も目標に達しているが、解決方法の内容が合致しているかは確認できていない。これは非常に難しい内容である。

これらの考察をふまえて、更に充実した声楽の授業を進めていきたい。特に、2)の到達目標の達成を目指す工夫を考えたい。また、自分には出来ないことを講師等を招いての授業として企画していきたい。